

平成26年度第2回逗子市立図書館協議会会議録

日 時 平成26年10月31日（金）

10:00～

場 所 市庁舎5階 第6会議室

1. 開会

2. あいさつ

3. 議事

(1) 平成26年度図書館の利用状況について

(2) 公民館図書室の動向について

(3) その他

出席委員

高鷲忠美会長 若林ふみ子委員 辻伸枝委員 汐崎順子委員 大河内誠委員

事務局

小川図書館長 鈴木館長補佐 利根川専任主査 相山主任

傍聴 4名

【鈴木館長補佐】 では、定刻となりました。委員さん全員お集まりですので、これから平成26年度第2回図書館協議会を開催いたします。

まず、本日の会議録を作成するに当たりまして、発言の録音及び傍聴の許可をあらかじめ御了承ください。それから、傍聴の皆様にお願ひがあります。傍聴に際しましては注意事項をお守りくださるようお願いいたします。また、報道関係者以外の録音・写真撮影につきましては許可をしておりませんので、よろしくお願ひいたします。

では、ただいまより協議会を進めさせていただきます。本日は図書館協議会委員5名全員が出席されておりますので、図書館協議会運営規則第3条第2項の規定による会議は成立していることを御報告いたします。これより図書館協議会運営規則第3条により、会長が議長となり議事に入ります。では会長、よろしくお願ひいたします。

【高鷲会長】 皆さん、おはようございます。皆さんも夏にはさまざまなところに行かれたと思いますが、私も8月の末にロシアのモスクワに国際学校図書館協会の大会があり行ってまいりました。ソ連とアメリカの冷戦の時代を生きてきた人間からすると、実際クレムリン宮殿や赤の広場にも行きましたので、モスクワはこんなに開けているのだとびっくりしました。ロシアの方はとてもよくしてくださったのですが、空港の入国・出国審査を昔ながらのお役人が対応しておりました。ロシアの食事もおいしかったです。地下鉄は、日本では大江戸線の六本木駅が、最も深くて42メートルだそうです。モスクワでは最も深いのは84メートルもあるそうです。1本のエスカレーターでおりるのに124メートルもあるそうです。足がすくみました。

それはソ連がアメリカの原爆とか、そういったものを恐れていて、シェルターにしたのではないかという話もありました。実際に第二次世界大戦のとき、ドイツ軍が来たときにシェルターとして使っているようです。それぞれの駅に彫刻・絵画が飾られていて、すてきな駅でしたけれども、2分置きぐらいに電車が来ますが、汚い地下鉄で、ものすごい音がするものですから、帰ってきて日本の地下鉄は、こんなに静かできれいなのだと、つくづく思いました。

帰りにドバイに寄って、828メートルの世界最高の建物に上ってきましたけれども、気温が42度ということで、外を3歩も歩けば汗びっしょりになってしまい、ひどい目に遭いましたが、なかなかおもしろかったです。ドバイは国じゅう免税ですから、安いですね、とても。また12月か1月にはセールを実施しますから、女性の方は財布が軽くなるのではないかと思います。本当に世界一流のブランド品が4割、5割引以上になるそうです。

それでは議事に入りたいと思います。議題1として事務局から平成26年度図書館の利用状況について

て、報告をお願いいたします。

【利根川専任主査】 それでは、本年度9月まで上半期の利用状況について御報告させていただきます。

まず、お配りしております資料の1-1をごらんいただきたいと思います。本年度9月までの統計の数字を載せてあります。入館者数、貸出者数、貸出冊数、予約件数、これも図書館協議会のつど報告をしてきておりますが、当館では平成20年度をピークに減少傾向が本年度も続いております。原因としては、電子書籍やスマートフォンなどの普及が考えられるのではないかと考えております。

レファレンスに関してですが、4年前より、2階のカウンターにレファレンス専門のコーナーをつくり職員を配置する対応をとってきた中で、レファレンス記録を蓄積してきたということもあり、同時にそのレファレンスコーナーの窓口に立つ職員のスキルアップという部分も見えてきたものと思います。かつての単に本を借りにくるというだけというのではなくて、レファレンスというものに対する需要というものがかなり増してきて、それに対応できる体制が整いつつあると受け止めています。

コピーの件数はほぼ横ばいの状況になっております。

資料の1-2をごらんください、これは児童書のみに限った貸出冊数のデータを示しております。児童も、貸出冊数に関しては減少傾向が続いております。ただ夏休みクイズラリーなどを実施し、また定例のおはなし会では、辻委員も御協力いただいておりますが、工夫を凝らしながら最近は取り組んできているので、行事などの参加者が少しふえつつある状況にあります。

資料の2をごらんいただきたいのですが、本年度9月までの事業の実施状況を一覧にしたものです。先ほどもお話ししましたが、定例のおはなし会ですが、参加者がこのごろふえてきております。かつてはお母さんが子どもさんを連れて来るとというのがほとんどでしたが、このごろはお父さんも、お子さんを連れておはなし会にやってくるという光景が見られるようになってまいりました。

ブックスタートはほぼ従来どおりの参加者がありました。

子ども読書の日の記念講演は、毎年恒例の影絵の上演ですが、本年度はやや参加人数が少なくなっております。

科学遊び講座は、森裕美子先生の2日間にわたる講座ですが、相変わらずの満員盛況という状況です。

7月には高鷲先生に講師をお願いし、「学校図書館は学校教育のインフラ」と題して講義をお願いし、学校関係者なども含めて36名の参加がございました。

紙芝居の講座は、千葉晶先生に講師をお願いし、実施しました。2年ぶりの実施でしたが、大変な

盛況で、紙芝居に対する関心が相当あるのだというのを実感しました。

次のページにいきまして、クイズラリーに関しては、本年度は2年目になりますが、グランドマスター認定者が24名出ました。参加した子ども達がかなり熱心に勉強してくれたようです。

職業体験に関しましては、今年の夏は、高校生、大学生、それから11月には中学生が実習に参加する予定になっております。また、本年度は学校司書として新人が多かったので、8月に図書館で、図書館の仕事とはどのようなものかというのを学んでいただきました。

最後に、これは一般向けですが、ほぼ毎月上映会を実施しております図書館名画座ですが、参加者が4月から8月まで、全て外国の名画を上映しました。記録では100人となっておりますが、実際にはこれ以上来場されております。ただ、会場が100人という制限があるものですから遅くに来た人は残念ながら入場お断りしております。映画をスクリーンで見たいという方の需要が相当あるようです。しかし、図書館の映画会ですから、何らかの形で、図書資料と結びついてもらいたいと考えております。

後ほどくわしくお話ししたいと思いますが、本年度は4月に「健康・医療情報コーナー」を設置しました。6月には「石原慎太郎文庫」を設置をいたしました。さらに、本日は資料としてはお配りしておりませんが、資料の展示を積極的に実施しており、それらが御好評をいただいております。そのため、本年度前半はかなりの忙しさで、職員は頑張ってきたところではありますけれども、全体とすると、先ほど入館者数や貸出冊数の件で申し上げましたけれども、相変わらず利用者数としては減少傾向にあります。9月の市議会では、何とか入館者数や貸出冊数をふやす手だてはないのかという意見も出ました。

簡単ですが、今年度前半の状況を説明させていただきました。

【高鷲会長】 ありがとうございます。人口5万8,000人の市としては、さまざまなサービスを展開していらっしゃると思いますが、残念ながら入館者数、貸出者数、貸出冊数など若干減少傾向が続いているということですね。これはもう全国的な傾向のようです。この議題1に関して、御質問ございましたら、どうぞお願いいたします。

【若林委員】 先ほど映画会のところで、大勢参加者がいるが、本の利用に普及したらいいというお話でしたけれども、1階のカウンターの向かいの名画座コーナーに、原作本も置いていらしたんです。あれを見て、映画会の当日は、原作はこういうものが図書館にありますと、御紹介してあげるといいと思いました。

【利根川専任主査】 映画会の出入口で映画会に関連した本を出しております。

【鈴木館長補佐】 関連図書を必ず映画会の際に会場出入口に置いて、こういった本も一緒に読んでくださいということで御提案はさせていただいています。

【若林委員】 それはいいですね。

【辻委員】 年齢層は高齢の方が多いのでしょうか。

【若林委員】 高齢の方が多いですね。

【鈴木館長補佐】 大体アンケートで見えますと、60歳代以上の方が大半です。

【辻委員】 リピーターの方も多いいいことでしょうか。

【鈴木館長補佐】 多いです。

【高鷲会長】 外国の名画は、すごいですね。去年もそうでしたけれど、ほとんど定員一杯になっていますよね。

【汐崎委員】 これは予約制ではなく、遅く来た方は「ごめんなさい」ということですよ。

【鈴木館長補佐】 防火管理上の定員が決まっています。事件や事故が起きたときに、私たちの管理責任がありますので、人数制限はせざるを得ません。

【高鷲会長】 そうですよ。

【若林委員】 逗子には映画館がないというのが理由でしょうね。大船や横須賀中央まで行かなければなりませんし、古い映画にしても都内だとたくさんの映画館がありますけれども、この近辺にはありませんから、皆さん楽しみにされているのでしょうか。

【高鷲会長】 逗子からだ横須賀まで行かなければなりませんからね。

【鈴木館長補佐】 横須賀が一番近いですね。

【若林委員】 ちょっと遠いですがものね。

【大河内委員】 この上映承認というのは、著作権の関係もあるのですか。

【鈴木館長補佐】 はい。上映が許可された作品でなければ、上映はできないので、上映できるものが限られており、どんな映画でも上映できるというわけではありません。限られた作品の中から、図書館で上映できる優秀な作品を選んで、私ども職員の手で上映しております。

【高鷲会長】 著作権処理をしていないと、問題がありますからね。

【汐崎委員】 大学生が実習で来ているというのは、これは司書や司書教諭に興味がある学生なのでしょうか。司書課程受講中の学生は実習をしますよね。それとはまた別のことですか。

【小川図書館長】 司書課程受講中の学生の実習ですね。

【鈴木館長補佐】 そうです。結構期間が長いです。

【汐崎委員】 期間は2週間位でしょうか。

【小川図書館長】 相模女子大学の学生さんですね。

【汐崎委員】 逗子の図書館で実習させてもらえると、さまざまなことが学べるのでいいですね。

【鈴木館長補佐】 実習を受け入れる図書館が少なくなっているようで、指定管理の図書館だと結構厳しいところがあるのではないかと思いますね。

【高鷲会長】 何かほかにございませんでしょうか。

【汐崎委員】 レファレンスはコーナーをおつくりになって、市民の方の意識が変わり蓄積もできてきたというお話ですけれども、実際にどんな質問があるのでしょうか。

【利根川専任主査】 郷土に関するものが圧倒的に多いかと思います。

【汐崎委員】 職員も逗子に関するレファレンスに答えられるようなスキルアップは図っているのでしょうか。

【利根川専任主査】 職員が質問を受けて回答していくという経験を積み、事例を蓄積してきていますので、少しずつスキルアップが図れていると考えております。

【辻委員】 ホームページにレファレンス事例集をアップしていらっしゃるの、なかなかいいことだと思います。

【若林委員】 郷土に関するテーマ別の資料をつくっていただいています、すごくいいと思います。

【高鷲会長】 「健康・医療情報コーナー」の利用は多いですか。

【小川図書館長】 一ヶ所にまとめて本を並べているので、使い勝手がよくなっていると思います。それから配架場所を変えたのは、他人の目は気にしないでゆっくり選んでいただこうということが、その理由です。

【汐崎委員】 私も以前に勤務していた図書館にいたときに、医療の本というのは、この人はこういう病気なのかなと、それが例えば精神科系の病気やエイズだったりすると、なかなか人の目があるから行きづらいという光景を見てきました。逗子では独立したところで、あまり人の目を気にせずに見ていられる。貸出冊数は減っているとのことですが、そういう方はやはりそこで情報収集を済ませてしまって、いわゆる貸出まで結びつかないのかもしれないかもしれません。よく言われるのは貸出冊数で判断するところだと思いますが、館内利用の方たちがそういう形で活性化しているのであれば、利用が減っているというよりも館内で効果的に利用している方が多いということを書いていただければいいわけですが、それでもね。

【高鷲会長】 そうですね、いわゆる量ではなくて、質を評価できるといいですね。

【汐崎委員】 特に逗子のような小さな町では、貸出も大事だと思いますが、レファレンスにしても、健康・医療コーナーでの利用の方にしても、おそらく団塊の世代の方たちが、時間はあるので、割と長時間滞在されて図書館でさまざまなことを学習するということがふえているのかと思います。そういうのをきちんと数字で示せる指標がありません。

【高鷲会長】 何らかのコメントでもいいですから、報告の際は、きちんと触れたいですね。

【汐崎委員】 どうしても数字で見えてしまうと、減ってる減ってるという形でとらえがちですね。

【高鷲会長】 あと、「石原慎太郎文庫」はどうですか。

【小川図書館長】 結構さまざまな方が見にいらしています。

【高鷲会長】 遠方から来られる方が多いですか。

【小川図書館長】 遠方からも多いです。新聞に掲載されたこともあって、私が対応したので言えば、岐阜から若い男性が、慎太郎文学のファンだからということで、車でわざわざ見に来られました。

【高鷲会長】 私は個人的には石原さんが寄贈された本を見るのが楽しみです。多くの作家からサイン入りの本をいただいている。こんなに字が上手なんだとかね。

【小川図書館長】 作者自身のサインのある本がたくさんあります。そのまま展示するわけにはいかないものから、現在は書庫にしまってあります。少しずつガラスケースを使って展示していきたいと思います。

【高鷲会長】 楽しみにしています。議題1に関してはこのくらいにして、次に議題2の公民館図書室の動向について、事務局から報告をお願いいたします。

【利根川専任主査】 それでは、公民館図書室の動向について説明させていただきます。昨年度から小坪・沼間2つの公民館を現在の公民館から将来コミュニティーセンターに転用しようという動きの中で、本年11月の市議会に向けて、公民館を廃止し、新たにコミュニティーセンターに転用すること、そして現在の公民館図書室を図書館分室にする。そのための条例改正案と図書館分室にするに当たり、内部の改装の必要がありますので、そのための補正予算案を市議会に提案いたします。そこで承認いただければ、平成27年4月から、2つの公民館はコミュニティーセンターとして新たなスタートを切る。と同時に、公民館図書室も図書館分室として新たなスタートを切るという段階に入ってまいります。

具体的には、現在の公民館は社会教育課で管理をしておりますが、コミュニティーセンター転用後は、市長部局の市民協働課の管理となります。来年1月19日より、約2週間休館をさせていただき、コンピューターシステムの更新を予定しております。公民館とはオンラインでつながっておりますの

で、その更新の時期に合わせて、図書館分室にするための改装工事も同時に行う予定をしております。図書館分室となった場合には現在より3分の1程度はスペースの縮小を余儀なくされることとなります。それぞれ蔵書を1万5,000冊から1万7,000冊ほど所蔵しておりますが、改装工事の後、約1万冊強程度の蔵書の収容冊数となる見込みです。全体としてコンパクトな形にして、来年の4月から図書館分室として新たなスタートをするという予定をしております。公民館図書室の動向については以上です。

【高鷲会長】 ありがとうございます。11月の市議会で承認されればということですが、図書館分室になった場合に、利用者に対してのメリット・デメリットについて教えていただけますか。

【鈴木館長補佐】 まず、サービス自体は現在の公民館図書室と変わらないサービスを提供するということを目的とします。あと、現在は公民館の職員が管理をしておりますが、コミュニティーセンター転用後は、図書館の職員が直接管理をするということで、より図書館の機能を、サービスを提供しやすくするという考えています。将来的には図書館で行っているようなサービスを少しずつ、図書館分室でも展開できたらいいなと考えているわけですが、当初はまず図書館の職員が管理するということで、十分な体制を整えるということからスタートしますので、来年度は現在のサービスを維持継続するという形で取り組んでいきたい、運営していきたいと考えております。

【高鷲会長】 蔵書も3割程度削減されるわけですから、それを補うような手だてを考えていらっしゃいますか。

【鈴木館長補佐】 もちろん公民館で利用されている本というのは、日常生活に密着した本、例えば実用本ですね。趣味の本や生活、料理の本などのジャンルのものがかなり利用されていますので、現在の蔵書の体制を維持しつつ、逆に科学系の本や参考図書といったようなものは、あまり利用がされていないので、その辺を削減の対象としたいと思っています。また、利用したいという希望の本については、図書館から予約という形で回送で持ってくるすることができますので、今までと同じような、満足いくサービスは提供できると考えております。

【高鷲会長】 ありがとうございます。それから人員ですが、これはどうなりますか。

【鈴木館長補佐】 図書館の分室ということで、カウンターに職員が立つ形になりますが、1日当りおよそ1.5人体制を考えています。具体的には、1人の職員が朝から夕方まで、朝9時に開館して5時に閉館となりますが、終日1人の職員がいて、利用の状況を見ると、昼過ぎから利用者の数がふえてきますので、午後からもう1人図書館の職員が分室に行き、午後は2人というような体制で窓口対応したいと考えております。

【高鷲会長】 ありがとうございます。

【辻委員】 蔵書についてですが、スペースも減って、約1万冊収容ということは、沼間と小坪と、おのおの5千冊に近い冊数が抜かれるということですね。

【鈴木館長補佐】 実際は小坪が現在、1万5,000冊ぐらいなので、3000冊ほど。沼間は1万7,000冊なので、4,000冊ほど抜いていくという形で、現在も古い本やあまり利用率のよくないような本というのは、少しずつ抜いている状況です。最終的には約1万冊前後になる見込みです。

【辻委員】 その抜かれた本の行方は、図書館の蔵書とするのか、それとも例えば絵本は図書館分室にも必要だとは思いますが、例えば学校図書室に回されるのでしょうか。抜かれた本の行方と、あと今まで選書会議等に沼間と小坪の担当の職員の方がいて、それで選書をしていらっしやっと思えますが、新しい本のメンテナンスはどうなっていくのかを知りたいのですが。

【小川図書館長】 その点は、変更する予定はありません。今までも毎月2回、選書会議を開いておりますが、公民館の担当職員がそこに加わって、予算も配分してありますから、公民館分としては沼間はこれだけ、小坪はこれだけという形でリストを出してきますので、全体の調整の中で、場合によっては、これは公民館ではなくて本館に置こうとか、逆にこれは公民館に置こうとかということを決めています。ですから、そのところは全く変更する予定はありません。

それから、冊数を減らすというお話ですが、実際には蔵書冊数を維持するために公民館図書室の古い本は減らさなかったということがあります。言ってみれば学校図書館の図書標準のために本の冊数を削減するなということがありますが、それと同じような形で、古いけれどもそのまま残していた。レファレンスブックなどもほとんど古いままで、そのまま残していました。月に一度の打ち合わせには、図書館から担当職員が行ってはいませんが、日常業務は公民館職員に任せていますから、こちら側がこうしたいというところまでは、言えませんでした。今までの利用実態から、今回は約1万冊程度で運営できると考えています。例えばベストセラーになるような本というのは、各公民館に1冊ずつと、図書館と合わせて3冊購入していますが、購入当初は予約から予約で全て回転しているので、実際にはそれが誰にでも利用できるようになって棚に並ぶまでには、1年以上かかります。それは子どもの本に関しても同じですから、そこはもう少し見直しをしながら、よくしていこうと。資料購入の予算が削減される可能性があるので何とも言えませんが、予算を大きく削減されるということは全く考えておりませんので、コンパクトにはなるけれども、もう少しきちんと使える本を取りそろえていきたいと考えています。

【辻委員】 わかりました。

【汐崎委員】 とても基本的なこと、前から伺っているのかもしれませんが、公民館図書室の本は基本的に図書館の蔵書なのでしょうか。

【小川図書館長】 全てそうです。

【汐崎委員】 では、管理換えをする必要はないわけですね。

【小川図書館長】 その必要はありません。

【高鷲会長】 現在の管轄は社会教育課ということですね。

【小川図書館長】 社会教育課で、社会教育課所属の職員が現場を維持管理しています。

【汐崎委員】 蔵書としては逗子市立図書館全体の蔵書の中の一部という形ですね。

【鈴木館長補佐】 図書館の予算で公民館の資料を購入しています。

【小川図書館長】 ですから、選書は全て公民館担当の図書館の職員がリストアップして、意見を聞きながら行っています。

【高鷲会長】 逆に、廃棄は図書館主導ではできないということですよ。

【小川図書館長】 はい、月に一度の打ち合わせの際、除籍の作業もしてきますが、勝手に大きく抜くということはないで、そのまま残してきていたということがあると思います。

【高鷲会長】 実際、開館時間は9時から5時で、仕方がないのかなと思ってしまいます。

【小川図書館長】 やはり新聞を見に来る高齢の方が、図書館もそうですけれども、多いですからね。新聞の取り合いになることもよくあります。それと、これまでは公民館のカウンターでしたけれども、今度は図書館分室独自のカウンターになります。図書館の職員が独立してそこに詰める形になります。

【高鷲会長】 この1.5人体制というのは、結局どういう体制になるのですか。

【汐崎委員】 どのような勤務体制にするのでしょうか。

【辻委員】 自転車で行くのですよね。

【鈴木館長補佐】 朝から配置につく職員は直接、直行直帰という形で、あとお昼から図書館から派遣する職員は、一応市内出張旅費ということで、バス代の予算を計上する予定でいますので、バスで行ったり、荷物が多いときは公用車を予約して車を運転して行ったり、それからできれば電動自転車を購入するための予算要求をしようと思っていますが、ただ、予算がつくかどうか。あと、自転車に乗れない人もいます。

【高鷲会長】 自転車は、怖いですよ。

【若林委員】 逗子はアップダウンが結構多い町ですからね。

【小川図書館長】 一応逗子は自転車の町です。

【辻委員】 あの狭い道路を、行くのですね。

【鈴木館長補佐】 バスに乗って行くことも想定しています。

【小川図書館長】 自転車は、特に小坪は怖いです。

【汐崎委員】 その分、市立図書館が担う人的な援助などが多くなるわけですが、その分の人員増加は考えていらっしゃいますか。

【小川図書館長】 それは、現在公民館に勤務していらっしゃる人たちが、とりあえず残るような人も何人かいらっしゃると思いますので、それプラス図書館側でどう対応するかということです。

【鈴木館長補佐】 分室用の人的の要望というの、こちらから上げていく予定です。

【汐崎委員】 そうですね。ですから図書館分室へ図書館の職員が行くことによって、今度は図書館の体制が薄くなってはいけませんよね。

【小川図書館長】 それはそういう話があったことは事実ですが、それではできませんということで、現在話を進めてきています。

【高鷲会長】 いずれにしてもやりくりが大変ですね。ローテーションの作成が難しくなりますね。

【汐崎委員】 ローテーションを組むのは、すごく大変だろうと思います。

【高鷲会長】 議題2はまた後で、まとめて質問していただくことにして、議題3、その他に移りたいと思います。説明をお願いいたします。

【鈴木館長補佐】 その他の案件ということで、先ほども利根川から説明ありましたように、今年度は4月から「健康・医療情報コーナー」の設置をさせていただきました。おかげさまで大変好評で、1階の雑誌コーナーの入口にも関連図書ということで、毎月医療のテーマを決めて、風邪の季節には風邪に注意とか、それから夏には夏の健康医療といったような情報を提示しながら、関連図書の展示をしています。そこのところは最も利用者の方が目につくところなのでしょうね、かなり借りられています。あわせて6月には「石原慎太郎文庫」の新設ということで、ちょうど本年は市制60周年記念ということの関連で、すごく盛り上がりました。7月8日には石原慎太郎さん本人をお招きしまして、図書館2階で記念式典を開催しました。約3,200冊の書籍を御寄贈いただいて、それで現在は400冊ほど図書館の2階に展示しています。その時の新聞のコピーを皆さんにお渡しいたしましたが、都合のついた委員さんには当日御出席をいただきましたので、この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。御出席どうもありがとうございました。また、御出席いただけなかった委員さんにつきましても、2階の展示コーナーがございますので、ぜひ御見学いただければということで、情報提供させていただきました。

それから、あわせてコピーの裏面のところですが、これは昨日の神奈川新聞に記事として取りり上げられたものです。NHKの連続テレビ小説で、現在「マッサン」を放送していますが、その中でモデルとなった竹鶴政孝さんの奥様のリタ様が、60歳前後のときに病氣療養ということで、逗子に滞在されたということ、この内容が早瀬利之さんの「リタの鐘が鳴る」という本の中にそういった記載がございますので、逗子市に縁があるということで、今回企画展示をさせていただきました。図書館2階の階段上がったところで展示をさせていただいて、11月15日までを予定しています。この新聞記事が掲載された途端、昨日から来館のお客様で賑わっています。

【高鷲会長】 現在放送されている番組ですからね。

【若林委員】 また上手ですよ、あの女優さんが。

【鈴木館長補佐】 やはりNHKの効果はすごいということで実感しております。

【辻委員】 大学図書館のカウンターにも「マッサン」の本ないですかと、関連の本などについて、聞いてくる学生さんがいます。

【鈴木館長補佐】 皆さんもぜひ2階で御見学いただければということで、御案内をさせていただきました。

【高鷲会長】 どうもありがとうございました。他に御質問等ございますでしょうか。

【辻委員】 この「健康・医療情報コーナー」ですけれども、さまざまな企画をされていますが、このコーナー専従の担当の職員の方がいらっしゃるのでしょうか。それともスタッフのローテーションで取り組んでいるのでしょうか。

【小川図書館長】 ローテーション制では難しいので、ある程度担当を決めて進めています。

【鈴木館長補佐】 職員の分担をそれぞれの業務で決めていて、その中で医療担当という担当もつけていますので、その仕事以外にも、もちろん仕事をしており、どんな展示をしようとか、今の御時世でどういうものを掲載したらいいかというようなことを検討しながら展示をさせていただいています。

【汐崎委員】 その健康医療情報に関して、仕掛け人の先生に私はお世話になっていますが、病院に行く方は、病気になって初めて行きます。でも、現在は健康に対する指向が強く、だからその前の予防という意味では、例えば病院では病気に関する本だけだけれども、市立図書館は健康食とか、メタボ対策とか、いわゆる健康医療の情報にターゲットを絞ったものではなくて、多様な面から健康に、幸せに暮らせる生活の情報を提供できる。それがいわゆる市立図書館のメリットでもあり、病院には行かないけれども、少々自分の健康に不安があったり、そういう病気をした後のケアに不安があった

りするという方に、健康医療情報の提供というのができるのが市立図書館だなど、お話を聞いていて、すごく思います。ですから、わざわざ医療機関に行くほどではないけれども、やはり自分の体が気になっていることとか、それにまつわる、もっと大きな、多面的に自分の体のことを考えたりとかするのに、これからも高齢化社会になっていき、病気もさまざまに出てくるので、おもしろいなと思いました。ですから、市立図書館が特に新しいものももちろん購入しなくてはいけないとは思いますが、すごく専門的なものではなくても、とても身近なものや闘病記とか、あるいはさまざま分野から健康医療につながるものをくっつけていく。それもやはりセンスがいることだと思います。病気のことも知りながら、図書館の資料についてのセンスが必要なので、そうするとやはり専門の担当の方が、長い目できちんつくっていくのが一番いいのかなと思ったりもします。

【高鷲会長】 そうですね。それと、法律もそうですけれども、健康医療も一歩間違えると危険ですから、そここのところの線引きをきちんとしなさいといけませんよね。

【辻委員】 糖質制限をやったほうがいいという人と、やらないほうがいいという人、何か両方の本が出てると、どうしたらいいのだらうと迷ってしまいます。

【汐崎委員】 たとえば、お米を「食べなさい」というのと「食べるな」というのも惑わされますよね。

【高鷲会長】 さまざま出てきますからね。

【大河内委員】 多様な選択の幅があればいいと思います。逗子市はスポーツ都市宣言をしているので、僕も田舎に高齢の親父とおふくろがいますが、逗子の場合も高齢者が多いので、病気をされている方が図書館には行けないけれども、その息子さんとかお孫さんが心配されて本を見るというのは、効果があると思います。この間、鎌倉の本屋に行ったら、たまたま同級生と会って、彼は医療の本を見ていました。いや、うちの田舎の親父か、うちもそうだよという話になりました。ですから、該当の方がということだけではなく、現在僕もスポーツ団体の役員をやっているので、健康を維持するためには、衣食住も含めて、運動も含めて、そういう情報が図書館にあるというのはすごくいいことです。逗子は高齢社会だけれども、その高齢者にさまざまな方々がかかわっているんで、その一つの情報源として図書室、図書館があるということです。逗子小学校に行くことが多いのですが、市立図書館はガラス張りのところがよく、友達も視察に来たのですけれども、すごくゆったりした感じで本を見ていたので、貸し出しするよりは、ソファでラウンジ的に見るというようなことで、すごくいいなと、逗子に住みたい。でも土地が高いなと言っていました。ですから、すごく逗子に合った、そういう部分があるのかなという印象ですね。

【高鷲会長】　そうですね。逗子市は、高齢化率が高いのでしたよね。

【小川図書館長】　30%を超えました。

【高鷲会長】　神奈川では一番高いはずですね。

【小川図書館長】　30%を超えてはいるけれど、自分も含めてそうですけれども、普段自分が病気になるとは思っておられませんね。けれども、やはりさまざまなことがあるよということを、手にとって知っているほうがいいのかというのがあります。関西地方でやはり同じような仕事に取り組もうとしたときに、図書館員がまず反対したと聞きました。なぜ図書館がそうした余計なことをやらなければいけないのかという。それはもう役所に行けばいい、保健所に行けばいいことで、結構論争があったようです。ただ、その一方で、長崎では大成功で、病院を絡めて図書館でさまざまな講演会を実施していることがあったので、それでほかからもそのことが意識されるようになりました。慶応大学の先生と、国立がん研究センターの先生方と一緒に、現在逗子と関西では堺市が拠点となってプロジェクトチームということで何か仕掛けをしていこうという形になっています。科学技術振興機構の補助金をもとに、費用が出るようになっており、現在講演会の準備を進めています。12月12日金曜日の午後1時から3時ぐらいまでの予定で、横浜市立大学のがん担当の先生に来ていただいて、がんのお話をさせていただくということで「健康医療講演会、胃がんとその遭遇、まさか私が」と題した講演会を予定しております。横浜市立大学で、スケジュールの調整がうまくいけば、胃がんの担当の看護師さんたちも参加してくださるということで、勝手に図書館が進めているわけではないのですが、役所からも「ええっ」て顔されましたし、どうなるかはわかりませんが、地元の医師会にも協力をお願いには上がっています。

【高鷲会長】　保健所や病院との連携が必要になりますよね。

【小川図書館長】　できるだけさまざまな情報が手に入ったほうがいい。医者に行かなければならないということではなくて、図書館でもここまでできるんだということを、ぜひ取り組んでおきたいわけです。

【大河内委員】　そうですね、コミュニティーセンターの中の図書館ということで、多様な学習機会の提供をするのは当然のことなので、一部の保健所なども、そういう福祉の形ではなくて下駄履きで行けるといえるのは、どこのコミュニティーセンターも同じだと思うので、通勤の方がそこに行って、資料を手にとって見ることができる。テレビでも県のコラムがあるので、見逃した人はそれをすぐ次の日に、見たいなという人もいます。自分も自分なりの学習する部分があるので、それを統一したところに行けという形ではなく、図書館というところがあることによって、地域の方の安心感が得られ

ますね。

【高鷲会長】 敷居が低いですからね、図書館は。

【小川図書館長】 さまざまな情報がある中から、自分に何を拾い出していくかと、そういうことだろうと思います。ただ、これに取り組んできて、また少々深入りして取り組んでいるうちに、少し古くなると、新しい医療とは違うものになっていることに気づかされました。それをどうするかというのは、むずかしいですね。

【汐崎委員】 そうですね、日進月歩ですものね。

【小川図書館長】 検査一つをとっても、全く違ってきていますから、それをどう提供していくか。怪しげな医療情報はできるだけ避ける。これはもう出版社と著者で判断するしかないわけです。

【高鷲会長】 私も看護学科のある大学にいたことがあります。実習に学生が行きますから、先生が気を使い、図書館の蔵書で古いものは全て除いてくれと。臨床や実習に、そこでやはり本を持って行くので、そぐわないものを持ってこられては困ると。そこに気をつけてくれと言われたことがありますね。それと全く同じことが起こりますからね。

【小川図書館長】 書架に本を並べてみて、やはり古いなど。読んでみて、これはだめというのは、どうしても出てきましたので、現在それらの本は除いてリニューアルしつつあります。

【高鷲会長】 それは大変ですよ。情報を提供するのだから責任がありますからね。あと、市議会での質問もありますけれども、何かこれについてございませんか。

【鈴木館長補佐】 資料3が9月に行われた市議会の決算特別委員会で議員さんから質問を受けた内容のものです。決算ですので、予算にかかわる質問が大半ですが、特に図書館については事業運営の中身、具体的には本の選書方法とか、それから雑誌のタイトル数が多いとか、あと駅のブックポストに本を入れることによって、本の劣化が激しくなるというような御意見いただいたり、それから自動出納方式というのが話題になっているのでそういったものの質問とか、あとは購入価格、それから現在協議会の中でもお話があった貸出冊数の減少、そういうような関連質問を受け、それに対して回答したという事例を御報告させていただきました。

【高鷲会長】 自動出納方式というのは、コンピューターのボタンを押せば書架ごとぐるっと回ってくるというものですよね。

【小川図書館長】 議員さんたちが山口県下関市に見学に行っています。それで見ていらしたようですね。それで、ああいうことをすれば人手が減るのではないかとおっしゃったので、人手は減るかもしれないけど、費用は大変ですよという話をして、それで終わりました。

【高鷲会長】 自動出納方式は、出すのは便利だけれど、返すときが大変ですね。東京都府中市立図書館を見ていて、返す本がいつもたまっていますね。

【小川図書館長】 やはり作業をする人がいないといけないわけで、だれかがやればというのではいけませんね。ただ、返し方は楽で、来たコンテナに貸し出しするという形で入れてしまえばいいので、どのコンテナが来ても一向に構わないです。分類順に並べる必要は全くないのです。

【高鷲会長】 でも、費用はかかりますね。

【小川図書館長】 費用もかかります。建物の躯体も頑丈にしなくてはなりません。

【高鷲会長】 ランニングコストもかかりますよね、当然。

【小川図書館長】 あの躯体は平米当り3トンぐらいの床荷重がかかります。事務室では、大体平米300kgとか400kgですから、躯体を強化する費用がかかります。

【高鷲会長】 底が抜けそうですね。

【汐崎委員】 自動出納方式というのは、書庫の本が分類番号順に並ばないというか、どこにでも放り込んでしまい、所在情報だけがわかる。すごく図書館らしくないなという気がします。

【高鷲会長】 書庫の中には入れませんものね。

【小川図書館長】 書庫の中へは入れません。ですから、返却処理をミスすると、二度と出てこなくなる可能性はあります。

【汐崎委員】 本が潜ってしまいますよね。書庫とは、第二の書架のような気がしています。利用されなくなった資料は、やはりNDCなどの一定の規則で並んでいる。図書館員がレファレンスのときに探しに行けば、そこにあるといったように。でも、もし自動出納方式の図書館の書庫本で図書館員がレファレンスの本を、公開書架にはないとはいっても、書庫に分類順に並んでいるのではないので、書名とかを頼りにしか出してはこれないですよ。

【高鷲会長】 ワンポイントでしか探せないのでしょうかね。

【小川図書館長】 書名で検索をして、バーコード番号により機械が判読して、コンテナに載せて出してくる。

【汐崎委員】 ですから、例えば医療に関するレファレンスがきたときに、公開書架にはないけれど、書庫にはあるかもしれないと思い、医療の棚に行けば、こんな本があったなと思いつくかもしれない。でも、それが自動出納方式となると、自分ではっきり書名とかがわかってないと、たどり着けなくなりますね。

【小川図書館長】 そうです。しかも医療の本がまとまっているわけではなく、全てばらばらに入っ

ているわけです。

【汐崎委員】 ですから、すごく大変だなと思います。前に私も見学に行ったときに、とにかくさまざまな本が一つのコンテナの中に混在しているのを見ました。

【小川図書館長】 ですから、通常の書庫と併用にしたほうがいいわけです。長崎ではそうしていません。

【汐崎委員】 あと、ブックポストを撤去してもよいのではないかとありますが、主たる理由は本が傷むからということでしょうか。

【小川図書館長】 今回の市議会では、初当選した議員さんが皆さん質問されているようですが、大変素朴な疑問だと思います。借りたものを返すのは当然だろうと。ポストではなくて、図書館まで直接返しにすればいいのではないのかというところがあったりします。

【辻委員】 駅のブックポストは、おおむね好評だと思っていましたけれども、小林館長のときに導入し、逗子市が始めて、それから近隣の市町村にも普及していったという経緯があります。

【若林委員】 返却率がいいのでしょうか。

【小川図書館長】 いや、それは変わらないです。

【汐崎委員】 返す側としては気が楽ですよ。

【小川図書館長】 返却の遅れたものは駅のブックポストへ返す。

【若林委員】 私は、本は傷むのではないかと思い、なるべく図書館へ直接持ってきます。

【小川図書館長】 駅のブックポストは沈下式ですから、それほど傷みは少ないですけど、図書館のブックポストは、ドロップ式ですから、相当傷みが激しいですね。

【若林委員】 もし傷むのであれば、中を工夫されればよいなと思いますが。

【小川図書館長】 ですから、それはつくったときの人たちに言わないとなりませんが、利用は多いので、当分の間は使用していかざるを得ないと考えています。

【若林委員】 でも、駅のブックポストはすごく助かっています。

【汐崎委員】 図書館に返しに行きたいのだけれど、時間内は通勤で行けない人もいます。私は横須賀市に住んでおりますが、ブックポストが京急横須賀中央駅の内側にあります。やはり自分がなかなか開館時間内に行けないときには便利ですね。

【小川図書館長】 そういうメリットはありますね。ですから、現在は未設置の駅にも設けるべきであるという話も出てはいます。

【汐崎委員】 借りるに際しては、返却期限があるわけですから、逆に返すのが気が楽になるから、

どうしても無理ならば、ブックポストに返せばいいと思いますけれどもね。

【高鷲会長】 やはり利用者の生活動線の中にあるといいですね。それで返却をするからね。横浜市は金沢文庫駅にもありましたが、昨年撤去しましたね。

【小川図書館長】 それは聞いたことがありますけれども、図書館の予算ではなく、市民部局の予算だったそうです。

【鈴木館長補佐】 設置にも費用がかかります。

【高鷲会長】 そうですね。

【小川図書館長】 それで、横須賀市の場合には使用料も払っています。逗子市は払っていません。

【汐崎委員】 京急の横須賀中央駅にあるのも有料でしょうか。

【小川図書館長】 横須賀市の場合はそうだと聞いています。

【若林委員】 いたずらはないですか。

【小川図書館長】 あまりいたずらはありません。

【若林委員】 最も怖いのは、火のようなものを入れられることです。今は、不届きな人も多いですから。

【小川図書館長】 これまでに、そうしたことはありませんでしたが、ガムを入れられたことはありますね。

【汐崎委員】 定期的に回収に行かなければいけないので、一手間かかるのは確かですね。

【高鷲会長】 それが大変ですね。

【若林委員】 本は重いでしょうね。

【小川図書館長】 大変なのは、回収の際、駅前に駐車をしなければいけないので、警察にマークされることもあります。

【汐崎委員】 あと、ブックポストに返したのに、まだそれが返却の記録に反映されないというので、まだ借りたことになっているというようなトラブルもあると聞きますね。

【高鷲会長】 時差がありますからね。

【汐崎委員】 タイムラグがどうしてもありますね。

【若林委員】 回収する日を表示してありますものね。

【高鷲会長】 どうもありがとうございました。

【鈴木館長補佐】 報告ですが、逗子市の教育長ですけれども、平成26年6月21日付で新しい教育長に村松雅教育長が選任されましたので、この場で御報告をさせていただきます。

【高鷲会長】 ありがとうございます。事務局から説明、報告がありましたけども、何か全体に対して質問等ございますでしょうか。

【若林委員】 この間、偶然テレビを見ていましたら、一つおもしろい取り組みを見ました。せっかく図書館資料として購入したのに、すごく貸出件数が少ない本のベストテンを陳列したところ、結構それがまたそれなりに好評だったというニュースを聞いて、そういう特集もおもしろいのかなと思います。それから、石原慎太郎さんが、私の知り合いの「炎を越えて」という本の作者である杉原美津子さんの件で、石原さんが6月にテレビで放送されたのを見て、手紙をお出しになったんですね。そうしたら、その石原さんの手紙を、扉に印刷し、推薦みたいな文が出ましたが、こういう推薦文特集といったものも、例えば夏目漱石が長塚節の「土」に推薦文を書いているのが文庫本にも載っていますが、何かそういう特集の仕方もおもしろいのではないかと思います。

【小川図書館長】 現在展示しているのは、利用者が推薦するポップですね。あれぐらいで、それ以上になると今度は政治とか宗教の絡みの推薦が入ってくるので、そこはなかなか図書館としては難しいと思います。それから、図書館でたくさんの展示を実施しているのですけれども、これはふだん手にとられないものをできるだけ直接お見せする形でテーマを決めて展示をしていますので、使われない本はかなりたくさんありますから、そういう意味で言えば、できるだけ良い本だけでも、使われてないというのをテーマを決めて展示する中に入れるようにはしています。

【高鷲会長】 ICUやある公共図書館が展開している企画で、一度も貸出されなかった本の展示もぜひいくつか取り組んでみてくださいと良いと思います。いい本があると思うので。

【鈴木館長補佐】 一度も借りられていない本の展示を、いずれは取り組んでみようということ考えています。

【若林委員】 いい本の展示をぜひお願いします。

【辻委員】 けさもNHKのニュースで、東京都小平市での取り組みを紹介していました。話題はかわりますが、前回の協議会まで毎回議題に上がっていました図書館への指定管理者制度の導入問題は、現在はお休みというか、そういう状況かもしれませんが、市民交流センターはそれに先んじてもう進んでいると思うので、その辺のところの現状でわかる範囲の情報を提供していただけたらと思います。

【鈴木館長補佐】 わかりました。まず、市民交流センターの指定管理の動向についてですが、本年8月に、指定管理の選定場がありまして、11月の市議会に指定管理者の指定の議案を提出するというスケジュールになっています。ここで議会の承認が得られれば、指定管理者が決まり、来年の4月から指定管理者による運営という形になります。

【辻委員】 12月に市長選挙があるから、市議会が前倒しになっているのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 そうです。1カ月ほど前倒しの市議会になっていて、本年度は11月の市議会という形になります。具体的には11月7日が招集、最終日が11月21日。これが通常で言う12月市議会が1カ月前倒しとなったスケジュールになっていて、この中で議案の審議をするという形になります。

【辻委員】 業者が選定されて、とんとんと事が進めば、平成27年4月からということになるのでしょうか。

【鈴木館長補佐】 指定管理者による運営という形になります。これが1点ですね。

それから、図書館の指定管理の動向ということですが、本年2月の市議会に提案をさせていただいて、結果は否決ということで、現在に至る形になっています。その後特に図書館の指定管理の動きはありませんが、ただ、逗子市の行革の推進という方向の中では、まだ図書館の指定管理は残っています。要は、複合施設、文化プラザ全体の指定管理ということを市が進めていますので、図書館についても今後状況を見ながら、指定管理者制度の導入を進めていきたいという形で、市の方針に変わりはありません。

【辻委員】 先ほど館長もおっしゃいましたが、教育民生常任委員会の市議の方たちが下関市立中央図書館に行かれたそうです。「ずし議会だより」にもその様子が載っていましたが、皆様よく御存じかと思いますが、その下関市立中央図書館は来年度から直営に戻すとかいう動きもあるようなので、やはり以前から一貫して私は申し上げておりますけれども、指定管理者制度の導入ということには慎重を期してほしいということを発言させていただきたいと思います。

【高鷲会長】 ありがとうございます。あと何かございますでしょうか。明日から明治大学で日本図書館協会の大会があります。11月4日朝のNHK「おはよう日本」でJLAの大会の様子が紹介されるということ、11月5日のNHKの「あさイチ」に有川浩さんが出演されるということです。11月9日のNHKの「サキどり」で「来たぞ、図書館の逆襲」と題して、武蔵野プレイス、鳥取県立図書館、奈良県立図書館が紹介されると。あと、長野県小布施町も紹介されるということでしたね。あと図書館司書の役割について取り上げて欲しいという、JLAからのメールが私のところに届いています。

【汐崎委員】 ただ、テレビで紹介する内容は、何か焦点がずれているのですよね。図書館とは、こんなところかと、改めて言うというか。

【高鷲会長】 既成概念で言われがちですね。

【汐崎委員】 そうですね。それで聞き手も、ああ、そうなのかとなってしまいます。図書館側に近い人間としては、何で今さらと思うようなこともあります。でもそれだけ社会的な認知が広がって

ないということなのかなと反省をすることになります。ですから、いい方向で行ってくれるといいなとは思っています。今度の図書館大会は、100回記念の大会で、分科会も多く、40分科会で、公募型の分科会も入っています、明治大学の大きなリバティータワーで行います。当日受付オーケーとなっているようです。

【高鷲会長】 場所はいいですからね。参加費は7,000円でしたね。

【辻委員】 情報ということで、本日はチラシを忘れてしまいました。古本リサイクル市をまた図書館の協力で行います。12月21日の日曜日です。10時から3時まで、文化プラザのギャラリーで行いますので、よろしくお願いいたします。

【高鷲会長】 ありがとうございます。ほかにございますでしょうか。

【鈴木会長補佐】 協議会委員さんの任期が来年平成27年2月で2年間という任期が終了になりますので、任期終了前に最後の第3回の協議会を開催したいと思います。またスケジュール調整をさせていただきますので、ぜひよろしくお願いいたします。

それからあと、協議会委員さんについてですが、協議会委員規則で再任を妨げないという項目がありまして、現在指定管理の問題も今後どうなるかという意向もありますので、できれば継続して委員さんのお引き受けをお願いしたいということで、また個別に委員さんとそれぞれ調整をさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【高鷲会長】 どうもありがとうございました。若林さん、最後にありましたね。

【若林委員】 私の分野なんですけれども、最近、書評というんですかね、書評は新聞などでも盛んですし、それがすごくいいのですけれども、文学の場合は、評論を書ける人がいなくなっています。研究者が減っているから悪循環もあるのでしょうかけれども、そういうものにも私は図書館の方の目が行き届くために、やはり指定というビジネスライクなものではなくて、きちんと図書館の伝統のようなものを守れる人たちが図書館にはいていただきたいなという気が、一般市民として思いました。

【汐崎委員】 絵本専門士というものを、今年から国立青少年教育振興機構で認定しているのですが、いわゆる専門の資格となるそうです。1年間の受講で結構費用もかかりますが、30人募集したところ、800人の応募があり、それで、名だたる作家の方をお招きして、10回ぐらいの講座で、それをきちんとクリアして単位を取ると、絵本専門士となれるのだそうです。第1回目は、私もたまたまかかわってしまい、書評を書くという講座を担当させられてしまいました。私自身は絵本というのは基本的に子どもたちに読書の楽しさと素晴らしさを知らせるといふか、読書の入り口になるものだと思っていたのが、その受講生たちは、それだけではなく絵本は大人が楽しむもの、絵本によって癒されるとい

った、絵本に対する熱い思いがすごくある。事前の課題で自分の好きな作品で、本の紹介本を書いてくださいといったら、本の紹介文としてできあがってきませんでした。いわゆる自分のその本に対する熱い思いや、この本を読めば、きっと心がほっこりしますというような内容の文章を書き、それを紹介文や書評だと思っているようです。図書館員も、客観的に本を評価するのが書評なのですが、それはトレーニングをしないとできません。書く時はまず皆さんの熱い思いは全て後ろにおいてくださいという話をしました。図書館員もそうやって書評に取り組むべきですね。新聞などに載っているのも、あれは書評ではなくて、いいところだけをピックアップして、読ませたいようにする紹介文です。書評を書くというスキルは、図書館員が本を評価して自分たちの蔵書構築をしていく上でとても必要だと思います。図書館の役割ということを考えると、こういう絵本専門士ではなくて、図書館の本のことがきちんとわかり、子どもなり利用者なり、さきほどの医療情報もそうですけれども、きちんと情報を客観的かつ正確に理解した上で、間違いのない、正確なものをきちんと手渡す必要がありますね。講座では添削していて、どうしてこのような文章を書くのだろうか。それも受講生はある一定の経験がある方という条件であったにもかかわらず、そういう状況でしたから、何か世の中がそういう方向に動いているなという印象を持ちました。

【高鷲会長】 アメリカやカナダだと、児童図書館サービスの科目の中に、児童書の書評をきちんと書くという授業がありますよね。

【汐崎委員】 きちんと児童書の書評誌も出ているくらいです。

【小川図書館長】 日本の場合、図書館教育から書評というものがなくなっているでしょう。かつては、それ相応にありましたがね。

【高鷲会長】 一般の本の書評も、講習の中にありましたね。

【汐崎委員】 いいところも悪いところも、きちんと評価する意識が必要ですね。

【小川図書館長】 ですから今、おいしいところだけで本が売れているし、それでよしとしているからそこはやはり切なる願いがあり、なかなか難しいです。職員にそれに取り組みといても、やはりそれなりに学ばないと僕はできないような気がします。

【汐崎委員】 でも、逗子市の職員は勉強していますね。

【若林委員】 それは、お世辞ではなくて、カウンターでの対応の姿勢を見ているとわかります。皆さん、とても優秀ですね。

【小川図書館長】 それは自分なりに勉強しているからだと思います。

【汐崎委員】 図書館員の方が勉強会をしようという話も聞いています。

【若林委員】 とても逗子の図書館の方は、生意気なようですけれども、すごくいいです。

【小川図書館長】 長崎では、現在も続けています。

【高鷲会長】 逗子も、そういう方向に向かってほしいですね。本日は、どうもありがとうございました。